# 戦い、親しさ、使命 (5) 念禱、観想の 祈り

<u>「何か言ってください、イエスよ、</u> 何か言ってください」

キリストと二人きりになる

暗闇と試練の中で

あなたが私を祝福するまで、私はあ なたを離しません

 司祭は飾らずに答えました:「頭に不思議な考えが浮かんだのです。主にこう申し上げていました:『もしあなたを永遠に見ることができないう不幸に私が陥ると知ったなら、私は今、あなたを手放しません。あなたを手にしているのですから』と」 ITI。

雅歌の花嫁は言います:「恋い慕う 人が見つかりました。つかまえまし た、もう離しません」(雅歌3・ 4)。この言葉は、兄エサウとの出 会いを前にして、一晩中格闘したヤ コブが、未知の相手にした懇願を思 い起こさせます:「ヤコブは独り後 に残った。そのとき、何者かが夜明 けまでヤコブと格闘した。ところ が、その人はヤコブに勝てないとみ て、ヤコブの腿の関節を打ったの で、格闘をしているうちに腿の関節 がはずれた。『もう去らせてくれ。 夜が明けてしまうから』とその人は 言ったが、ヤコブは答えた『いい

え、祝福してくださるまでは離しま せん』。『お前の名は何というの か』とその人が尋ね、『ヤコブで す』と答えると、その人は言った。 『お前の名はもうヤコブではなく、 これからはイスラエルと呼ばれる。 お前は神と人と闘って勝ったから だ』。『どうか、あなたのお名前を 教えてください』とヤコブが尋ねる と、『どうして、わたしの名を尋ね るのか』と言って、ヤコブをその場 で祝福した。ヤコブは、『わたしは 顔と顔とを合わせて神を見たのに、 なお生きている』と言って、その場 所をペヌエル(神の顔)と名付け た。ヤコブがペヌエルを過ぎたと き、太陽は彼の上に昇った。ヤコブ は腿を痛めて足を引きずっていたし

(創世記32・25-32)。

## 「何か言ってください、イエス よ、何か言ってください |

私たちは、祈りの時間に心を静めて 観想の祈り(念禱)をするたびに、 一種の戦いに入ります。「この神 は、敵対者でも敵でもありません。 つねに神秘のうちにとどまり、近づ きがたいように思われる、祝福をも たらす主です。そのため、聖書作者 は戦いという象徴表現を用いまし た。戦いは、魂の力、望むものに堅 忍と粘り強さをもって近づこうとす ることを表します」「27。「念禱とは イエスへと注ぐ信仰のまなざしで す」ぼ。それはイエスを探し求め、 探し続け、祝福をもらうまで、つま り「イエスのまなざしの光」が「わ たしたちの心の目を照らしょすま で、主から目を離さないまなざしで す。

私たちはそのまなざしに何を求める のでしょうか?イエスの御顔、思

い、平和、心の火…。そしてもしそ の祈りの時間に、私たちが望む出会 いが与えられなければ、そうなるま で忍耐強く待つ覚悟が私たちにはあ ります。「暇があるときに念禱をす るのではなく、主に心を向けて過ご すための時間を作るのです。そのと きには、(…) 主から一刻も気をそ らさないという固い決心が要りま す」「5」。「念禱はたまものであり、 恵みです。謙虚で自分の貧しさを 知っている者でなければいただくこ とができないものです | 「61。まさに それゆえに、神は私たちの忍耐を必 要とします。私たちが「主よ、私は ここにいます...私は動きません、ど こにも行きません | と言うことを必 要としているのです。「何か言って ください、イエスよ、何か言ってく ださい」と、聖ホセマリアが祈りの 中で時折繰り返していたように

「つ。

### キリストと二人きりになる

ヤコブと格闘した神秘的な人物は、 呼ばれたわけではありませんで現れたわけではありませずでです。彼は自らして今も同じれるがしたのです。これたちにはいたちにはいきのでするが、なぜすることにはいきのである」を渇からこと、 第1のではいきのでからでからでからです。 第2のでは、「神はいきののでからである」ではいきのです。 第3のでは、「神の心のでからでからでからでからです。 第4のでするが、でき」でするが、できないです。 第5のでするが、ではいきのです。 第5のでするが、でするがは、神でもないです。 まずいまするです。 第5のでするが、ではいきないです。 第5のでするが、できないますが、できないます。 まずいまするです。 まずいまするにもいまする。 まずいまするにもいまする。 まずいまするにもいまする。 まずいまするにもいまする。 まずいまするにもいまする。 まずいまするにもいまする。 まずいまするにもいまする。 まずいまするにもいまする。 まずいまする。 まずいまなる。 まずいなる。 まななる。 まななななななななななななななななななな

私たちはといえば、ただ単純に神の前に立てばよいのです。その出会いの場は、感情や想像、理性だけではなく、心、つまり「わたしたちの心理的傾向よりももっと深いところ」であります。そこにいること、その愛にとどまることが大切なのです(ヨハネ

15・9参照)。私たちは単なる心理的な操作や、無の境地に至るための努力に取り組んでいるのではありません。私たちの観想はキリスト教信仰の構造を持っています。それは「人間と神との間の親密かつ深い個人的対話」IIIIです。

ですから私たちは、まさにその瞬間 にやってくる不都合な〈訪問客〉と 戦おうとはしません。追い払おうと するよりも、最良の方法はそれらを 単に無視することです。キリストと 二人きりになり、主が完全に私に向 かっておられることを自覚し、そし て私もまた主に完全に心を開くよう に招かれていることを意識します。 〈格闘の相手〉は時間的な隙を与え てくれません。彼は一瞬たりとも私 たちから目を離しません。しかし、 私たちは脇にそれて、背を向け、彼 を放置してしまう可能性がありま す。しかしそうすれば、彼の祝福を 失ってしまいます。

ヤコブは格闘する相手から目を離し ません。注意を怠らず、視線を逸ら さず、心の方向を見失わないように しなければなりません。スマート フォンを見る?いいえ、そのような ことはしません。それでは神との内 的な接触が断たれてしまいます。仕 事の計画を立てることや周囲の出来 事への好奇心などによって気を散ら すことはどうでしょうか?いいえ、 そのような思いは脇に置いておきま す。また、例えば期待に応えるとか 自分にふさわしい仕事をするといっ たような、気が付かないうちに心が 自分にばかり向くような思いにも気 をとらわれません。私たちの全人生 はある人、つまり「私たちが知り、 付き合い、愛したいと望んでいる御 方、イエス・キリストーに集中して います。そして「イエスを私たちの 人生の中心に置くことは、観想の祈 りにさらに深く入ることを意味しま すしばる。その呼びかけは人間の根本 に関わるもので、日増しに人生に包

括的な影響を与えていきます。神は 観想の賜物を求めて戦う者を祝福し ます。それは永遠の命の賜物の先れ りであり、私たちはすでにそれを れたちはすでにそなる いが始めています。「無邪気な子や の心で始めたこの祈りの道は、今 はこて静かな道、確実な道に発展し はした。『わたしは道である』と仰 せになった御方との友情の歩みに 従っているからです」[13]。

観想は「『恋い慕う人』(雅歌1・7)を探し求めます。その方とはイエス」です。イエスは私呼であり、そのなどを友にしたであり、「当れているでは、当れているでは、当れているでは、はいかでは、はいかでは、はい道をはいがでは、はいがでは、ないでは、はいがでは、はいばないです」では、そのでは、というでは、はいばないです。には、そのを通して、私たちを通りなものを通して、私たちをがある。(雅歌1・2000年)には、1500年)には、2000年)に

へと導く橋です。その〈戦い〉は、 視線、微笑み、顔、そして何よりも 心の出会いを意味します。それはイ エスの心情を自分のものとし、

「『キリストの内的知識』を培い、よりいっそうキリストを愛し、キリストに従う」『『ことです。今日、主は私と一緒にいてどのように感じているでしょうか?私は主の喜びや悲しみを感じ取り、それを自分のものとしているでしょうか?

#### 暗闇と試練の中で

戦いは夜に繰り広げられます。それは信仰で生きる夜です。信仰の他に主と顔と顔を合わせるための手段はありません。私たちの探求は「純粋な信仰のうちに」暗闇の中で行われます。「その信仰とは、わたしたちをイエスから生まれさせ、イエスのうちに生きることができるようにしてくれる信仰のことです」「呵。感情

ではなく(それが訪れれば歓迎し、 去ればそれでよしとします)純粋な 理性でもありません。私たちは精神 的な〈曲芸〉をするのではありませ ん。私たちが灯すのは、私たちとの 出会いを望む生ける方への信仰で す。信仰において、私たちは感覚の 即時性も、論理の明確さも持ち合わ せていません。私たちは直観の時ま で、薄明かりの中を歩んでいます。 しかし、信仰の暗闇はより遠くを見 ることを可能にします。昼間、私た ちの視界は数十キロメートル先まで 届きますが、夜には何百万光年も離 れた天体を見ることができます。信 仰は私たちに新しい世界を見せてく れます。

観想の戦いはまた、落胆や乾燥、信仰の疲れ、さらには多くの財産を持っているために主に完全に身を委ねないことの悲しみ(マルコ10・22節参照)にさえも直面することも意味します。または、時に私たちのも

のとは非常に異なって見える神の論 理に対する内なる反抗心や、それが 自分には向いていない、その感性が 自分にはないという思いと向き合う ことを意味します。「私は幻想に 浸っているのではないか? いったい 何の役に立つのだろう。あまりにも 神秘主義的ではないか? | この時、 ヤコブは戦うのをやめることもでき たでしょう。実際、彼は戦いながら ためらいを感じたかもしれません。 しかし、彼は戦い続けました。私た ちは、愛の道、つまり信頼と委託の 道を歩んでいることを思い出しなが ら、固い決意を持って幼子の心で前 進していかなければなりません。

黙想の祈りが道のりに着目するものだとするならば、観想はその目指すものに目を向けることだと言えます。私たちは自分が一緒にいたいと望む方と共にいます。今、私たちは徳や決心、闘いについて考えません。それらはすべて黙想で取り扱い

ます。私たちの時間、私たちの時間 の空白は今、彼の存在だけで満たさ れています。私たちは望みを燃え上 がらせ、渇望し熱望し天国を先取り します。天国の大きさは私たちの望 みの大きさに比例します。神への渇 き、「神の涙のわけを悟りたい、神 の微笑み、神の顔を仰ぎ見たいとい う熱い望み!เหです。そしてその願 いを持って平和に満たされて観想の 道に入るとき、私たちは命を歩む者 となります。「そうなると、捕われ 人、虜になったように感じる。そし て、力に限りがあり過ちを犯しつつ も、最善を尽くして、職業上、身分 上の義務を果たしているならば、心 はそこから逃れて神に向かうことを 熱望する。ちょうど鉄が磁石に吸い 寄せられるように | [19]。

ヤコブは、神が出会いに来た場所に たどり着くまで、長い時間歩かねば なりませんでした。そこには同伴者 はいませんでした。聖書は、この出

来事は彼が一人になったときに起 こったと伝えています。また、彼は 荷物も持っていませんでした。持っ ていたすべてのものを川の向こう岸 に渡したばかりでした(創世記32・ 24-25参照)。そして「夜」が必要 です。つまり、その交流には心を静 めることが求められるのです。「こ の格闘のときばかりは、彼はどうす ることもできず、その狡猾さも何の 役にもたちません。もはやその策略 も打算も通用しません。 (...) その とき彼は、自分の弱さ、無力さ、そ して罪を神にさらけだすしかないの です」「201。神は、彼が無防備で、気 をそらす他のものから解放されてい る時に、彼を探しに来ます。なぜな ら、観想するためには、自由と心の 開放が必要だからです。自分の小さ さを認識し、出会いを願うこと以外 に何も必要ありません。もし私たち の心が他のもので満たされているな ら、私たちが待ち望む方は現れませ ん。彼と共にいること以上に大きな 渇望があってはなりません。

## あなたが私を祝福するまで、私 はあなたを離しません

「祝福してください」。太祖ヤコブ はそれ以下では満足しません。彼は 主をしっかりと捕らえ、離しませ ん。しかし、その祝福とは何でしょ うか?ヤコブは神を見る喜びを持 ち、そしてその喜びは、神を見ても なお自分が生きていることに気づい たとき、増します。祝福とは、神の 御顔を観想することであり、それは 私たちを神の平和、喜び、慈しみで 満たします。それは私たちの意志に よって実現できるものではなく、聖 霊の賜物に心を開くことによって得 られます。「わたしたちの全生涯 は、この長い戦いと祈りの夜のよう なものです。わたしたちはこの夜 を、神の祝福を望み、願いながら過 ごさなければなりません。わたした

ちは自分の力に頼って神の祝福を奪い取ることも勝ち取ることもできません。むしろそれを、へりくだって、無償のたまものとして神から受け取らなければなりません。このたまものが、ついには、主のみ顔を見いだすことを可能にしてくれるのです」[221]。

ですから、私たちは忍耐強く待たな ければなりません。ヤコブは夜明け まで一晩中待たなければなりません でした。彼は逃げず、あきらめませ んでした。私たちが何度も何度も願 い求めるなら、祝福は私たちに与え られます。私たちは自分にできるこ と、沈黙・落ち着き・心の自由を追 求します。一方、観想の賜物、知 識・聡明・上智を与えてくれるのは 神です。私たちはそれらを自分で得 ることはできません。それらは、神 が望むときに受けることができる賜 物です。私たちはそれらを謙遜に求 め、待たなければなりません。主は

それらを少しずつ、もしくは場合に よっては一度に与えてくれます。そ して、この祝福を一口ずつ、または 溢れんばかりに受け取ったなら、私 たちは遠くを見つめながら旅路を続 けます。その祝福は一時的なもので はなく永続的なものだからです。ヤ コブは出発しました…どこへ向かっ たのでしょうか?それはあまり重要 ではありません。大切なのは、彼の 魂にはすでに主の御顔が刻まれてい るということです。「太祖ヤコブが 戦いの初めに願った祝福が、今や彼 に与えられます。それは策略によっ てつかみ取った祝福ではなく、神が 無償で与えた祝福です。ヤコブはこ の祝福を受けることができます。な ぜなら、今や彼は独りきりで、保護 も策謀も策略もなしに、無防備で自 らを与え、降伏することを受け入 れ、自分自身について真実を告白す るからです | 12210

「わたしは顔と顔とを合わせて神を 見たのに、なお生きている」とヤコ ブは言います。この奇妙な戦いを通 して、彼は目の前にいる方を知るよ うになっていきました。私たちも生 涯を通じて、祈りによって神を知る ようになり、神を理解していきま す。あるいは、たとえ理解できなく ても少なくとも神の〈やり方〉を受 け入れるようになっていきます。私 たちは彼の名を知りたいと思いま す:「あなたは誰ですか?」。私た ちは彼を見たいと思います。そして 神は自身を現しますが、同時に隠れ ます。それは私たちが神を探し続 け、神によって生きるために、神の 探求によって生きるためです。

この神秘的な物語の結末は、私たちの信仰がほとんど常にそうであるように、逆説的です。神はヤコブを祝福し、その勝利を称えますが、結局のところ彼の腿の関節を外しました。太祖ヤコブは良く戦い、謎の相

手に屈することなく立ち向かいまし た。しかし、これからは足を引き ずって歩くことになります。それは この戦いを思い起こさせる一種の勲 章となるでしょう。「そして、この ヤコブこそが、神から祝福を受け、 その祝福とともに足を引きずりなが ら約束の地に入るのです。傷つきや すく、傷ついていますが、彼の心は 新しくなりました」[23]。私たちもま た戦いから、傷つき、刷新されて出 てきます。私たちの地上的な確かさ は外され、今は神の印によって導か れるのです。神は私たちを祝福し、 これからも祝福し続けますが、私た ちの真の安全は神の中にあるという ことを深く自覚するようにさせま す。そして、私たちは祈れば祈るほ ど、神を必要としていること、神と 〈格闘〉する必要があることに気づ きます。そして、ますます神の祝福 を求めるのです:「あなたが私を祝 福するまで、私はあなたを離しませ  $\lambda$ 

- [1] F. トロシュ『アルスの司祭、聖 ジャン=マリー・ヴィアンネ』(F. Trochu, Le Curé d'Ars Saint Jean-Marie Vianney, Lyon-París, 1925, p. 383)参照。
- [2] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2011年5月25日。
- <u>[3]</u> カトリック教会のカテキズム、 2715番。
- [4] 同。
- [5] 同、2710番。
- [6] 同、2713番。
- [7] 聖ホセマリア、内的覚書、1935 年12月12日および1937年12月20日 (apuntes íntimos, 12-XII-1935, citado en A. Vázquez de Prada, El fundador del Opus Dei (vol. 1), Rialp, Madrid, 1997, p. 582;

apuntes íntimos, 20-XII-1937, citado en Camino, edición críticohistórica, nota al n. 746)参照。

<u>[8]</u> カトリック教会のカテキズム、 2560番。

[9] 同。

[10] 同、2563番。

[11] 教理省、「Orationis formas」キリスト教的黙想のいくつかの側面についての手紙、1989年10月15日、3番。

[12] フェルナンド・オカリス、司牧 的書簡、2017年2月14日、8番。

[13] 聖ホセマリア『神の朋友』306 番。

<u>[14]</u> カトリック教会のカテキズム、 2709番。 [15] 聖ホセマリア『神の朋友』299 番。

[16] カトリック教会のカテキズム、 2715番。

[17] 同、2709番。

[18] 聖ホセマリア『神の朋友』310 番。

[19] 同、296番。

[20] フランシスコ、一般謁見演説、 2020年6月10日。

[21] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2011年5月25日。

[22] 同。

[23] フランシスコ、一般謁見演説、 2020年6月10日。

Ricard Sada

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ Tatakai-Shitashisa-Shimei-5-Nen-Inori-Kansou-no-Inori/ (2025/12/16)